

# 杖桑拾葉集

廿三

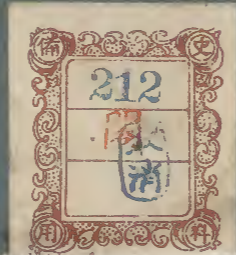
勿

清上

太政官印文庫			
三五册	三三四五架	三三四五號	和書門類

內閣文庫			
二四函	三五册	三三四五號	和書類

(三三)



內閣文庫	
番號	和 32345
冊數	35 (24)
函號	204 143

共廿五



扶桑通志卷之十二

目錄

一、

二、

三、

四、

五、

六、

扶桑拾葉集卷第二之三

目錄

三ノ草ノ日記

春至槐実澄御詠月和歌序

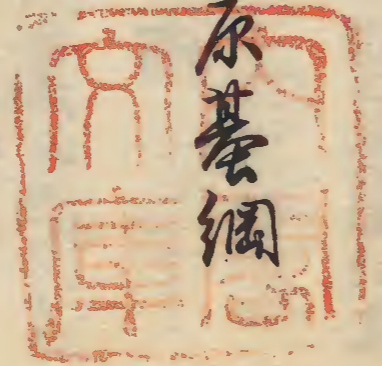
春至槐実澄御詠月和歌序

三ノ草ノ日記

世鏡抄序

田ノ鏡序

藤原基綱



同

同

同

友原之藤

藤原冬良

卷第二之三

新百人一首跋

一 釋道真

夏店記

釋肖柏

三愛記

同

雷乃郎西芳寺遊記

多良義真

聖井の湧けり跋

菅原和長

云々

云々

日記

云々

扶桑拾葉集卷第二十三

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

云々

藤原基綱

夫美孝乃通と異域の唐文虞舜と

ら統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と

是と統りともやつと本朝の明王聖主と





足をももぶらうにゆかえくたうとくはゆか屋の  
 高丈三香と大壇乃と小壇とむてと此の  
 乃よ東よりとくまうら螺鈿の香瓶の机一脚  
 ととて金銅の花瓶とくらと此はくり花と  
 をうらと此東より螺鈿の机二をうとて唐錦  
 とくおて佛供と具ぬ又座とんまうはくら  
 ありかある錦とあて御経一部十巻と  
 とく海と此はくり燈臺とをうら九枝の  
 瓦臺えわとくありあり八講のを座とあり  
 しがの根本中堂よ平安寺一のりとのり  
 けくわをゆきん千載之畫の燈とえんと

かんとくん心徳と大凡道場の本命と御  
 次才よのきくはく。條期有賜の事とあり  
 海とや正西の間のわむよ高座とをうら  
 座乃東よ又机とあてあり法養の対坐  
 威儀師の経とくらとくをうら又  
 座乃をうらに礼盤二脚とをうら母座花  
 けをわとくをうら花燈明とわやと紋幡  
 着燈よありわくわくといまの御園机  
 とくいあり又東に花の正西よけも大机と  
 なるの唐錦の折敷とくらとて金龜の火  
 舎紙とさあふと南よ敬瓶と大机と





子水才一乃同よかあり美五此南才一のるよ。  
 をのくよ木檻よふてそ一扱つとあく。  
 右右の堂童子の座とと陣の座の南の座  
 のお水れくし番書寮清とく右近陣  
 と衆僧乃集舎あこしと殿慢とふと掃  
 部座としく折は儀大長衣の乃云事  
 ありと包これ比乃一れとある道は法大寺かか  
 次才と作進さく。去廿三日よ八日時あり  
 僧若さくありくあさう終のよ内出のあ  
 ころく頭中のお実望の片執笔と清むと養子  
 とつとくむに此里亭よもらむと冠るは

一あく出座の中の時勅文ありと僧  
 名と後とれいやく左少毎宣秀とるし  
 てとれとくしとる。御願文の奉議式大  
 補長直車進しあ尼府とれと清とたり。  
 允これ清書と入木乃右筆累家ハ徳地と  
 求られと折家清歌とたり。と此人をれ  
 人よ修る事とる。本元ありと月輪殿  
干時先應よ後山か尼府 実泰云應母よ是心  
右大信院園白所長云應永よ後三条入道相園実  
 冬とるし乃清ととる。ととるは治暦元年  
 九月御八徳経儀マ干時奉行職事一記云御  
以元十年



備正 任月 西室備正 惠以下威儀所 隆嚴と先  
 約とせしむる。遺戸の香脱と有りて。取す  
 歩とつとあり。南東北とあり。正西の向を  
 以て。各座より。威儀所 磬とあり。と云  
 々。出居未易と云く。惣礼頭以下とも。衆人の  
 弁宣秀少。納言和長。右堂。臺子。乃座  
 とあり。とあり。乾喜と云。備乃あり。とあり。  
 通終て座より。後。乾喜とあり。とあり。  
 乃礼とあり。退り。西室備正。又乃後。師  
 高座より。有り。表白。此作法未終て。同者。乾行  
 信都 乃勝院 月座より。あり。中。乾院。乾中

乃とあり。宗とあり。又三。備宗乃。意。法  
 乾乃。教。至。遠。那。釈。迦。の。中。より。あり。とあり。  
 又。小。同。春。刻。とあり。とあり。乾。義。又。人。乃。座。と  
 あり。とあり。那。勝。五。法。とあり。とあり。種。とあり。とあり。  
 以下。尚。とあり。六。種。回。向。咒。乾。とあり。とあり。又。事。とあり。  
 乾。乃。儀。あり。とあり。とあり。とあり。乾。とあり。とあり。乾。乃。儀。  
 とあり。とあり。座。とあり。とあり。とあり。札。乃。とあり。とあり。同。時。とあり。  
 とあり。とあり。とあり。とあり。一人。不足。甚。甚。乾。乃。  
 未。とあり。とあり。何。法。底。とあり。とあり。とあり。お。乃。才。二。同。  
 とあり。とあり。師。学。問。不。乃。とあり。とあり。とあり。黒。乃。乃。南。  
 乃。美。子。とあり。西。上。南。面。とあり。端。とあり。とあり。上。とあり。乃。乃。乃。













唐の凡そとうこく。白の此教死とふと。  
 御短法書此等師と。重報ととと。いさうの事と。  
 元應より玄智は平列勅めく。重報ととと。と。  
 今亦又重報の事はかせく。終つたとと人同め。  
 一家三論の深意と物と見く。いさうととと。  
 答め又付は教の妙理とゆくとて。いさうと陳と。  
 かの信毎護法の二菩薩の宗旨此ありと。  
 下。勝方よりとん。いさうととと。いさうと。  
 才口日 大九日 著此とゆ。信及大納言 實隆  
 源中納言 俊量 小倉宰相中將 季種 武  
 戸大楠 長直 出居室經朝臣 源女 堂堂子

長胤 武戸後少輔 為宗 五奈侍從 也。證義三人 の 著  
 病乃後以下此衆僧次第より。泰上例乃正。  
 物産の備所。深栄同者。賢心也。入重玄門付。  
 等覺よか。いさう。佛果乃信よ。わらうと。也。物。  
 次よ。因。此。之。諦。下。勝。方。あり。や。いさう。と。と。  
 されと。天。命。宗。家。乃。所。人。月。教。位。乃。目。  
 是。いさう。と。也。旨。いさう。と。義。深。く。いさう。と。也。いさう。  
 才。二。日。大。對。論。此。執。氣。と。敬。せ。ん。と。也。法。就。  
 場。の。あり。いさう。と。也。就。慢。の。情。と。いさう。と。也。いさう。  
 と。生死。此。魔。軍。と。いさう。と。也。煩。惱。乃。惡。賊。賊。  
 何。ろ。り。と。と。と。也。いさう。と。也。いさう。と。也。いさう。と。也。いさう。

後坪の産に進て三井為宗の同題と由り  
 小童歌ありの如字道とやうくみく事大に  
 色りら物らちいふをうら物ら以地くを  
 とくくく次みゆら小楊梅桃李の名を  
 因縁よりと福しあをわら色いや優美  
 ありささるん次乃文少中遊門乃秋為  
 慶生此秋満是とくする一やと水天名  
 相承の將來と一宗同あるをこれ中延曆  
 園城此寺ありとわく宗旨成ありとぬ  
 高位とゆらうくゆら色ありとゆら  
 復ありとんとんととゆら物産秋刻と

うはくよりうはく北産と義論付きありゆら  
 て夏日梅長の節と夕陽斜照の天り  
 のんね

才女目 亦日 御願 今日結成ありうはく御  
 殿の如装束等より急ありとゆら  
 明日朝日此御拜ありとゆら  
 人辰の刻より皆参也とゆら 勅修寺大納言  
 教秀 久秋大納言 豊通 橋本中納言 又 其  
 殿と中納言 元と 新中納言 實高 中院宰相  
 通也 出居より美り物下 實平 右部少将 堂童  
 子 實平 為字あり 備昨昨日乃又産力





















と賞し一花月乃何ぞは歌なり  
 ありさし月と先中次仲もは仲  
 三又乃天を毎歳百おれ其あり  
 あり貴云子明日は徳辰も雲あり  
 嘆ありしと紙をを捨てて今夜は  
 あり風雅の感ありしと紙を  
 ありし明後日明日は陰晴を  
 あり廣亮の来夜の吟嘯と歌とを  
 をとじされをててと紙を  
 ありか破りしはわし一紙乃腹巻とあり  
 と紙をててて皆教顯れ書紙あり

里の終りしはけし乃松丸良枝和言の  
 浦乃明珠よありとやい由これそわ  
 とじくゆれを由ことり鮎狗のそ  
 多やしとていさう早懐とのあり  
 地乃歌をよとてとあり

萩乃上れ落しとみりか親あり  
 ありとてと月より月あり  
 風ありとて乃下萩よりそ  
 うらありとて月あり  
 うらありとて月あり  
 月ありとてとあり



かの国々おる名所のとく〜とく〜  
月火のふねもあつちゆく也

養正槐實澄の賦而夫妻和歌序

同

柳枝乃春好おきいふ予あつち〜乃日しれ物  
乃夕好あつち〜今の家とや〜  
時鳥のやさ月乃袖〜とれとを輝  
乃系山は流枕〜とれと何の曾直く儒  
伽塔〜らうい李益の梅乃月と賦  
〜朝え乃大乃ありこ思く心人と想  
〜ふ玉章乃大貳の妹のた座と梅も

か〜いい金も〜い遠きた〜  
近きゆい〜と熱りせ〜十首の廣  
曇と淋く平の九回乃熱腸と病と感  
〜堪〜と〜下りふ和春ともの地  
の〜い〜

ふ〜り何〜あ〜く〜  
けのおれまひもき〜深〜  
か〜枝今い〜あ〜  
む〜りま〜あ〜  
と〜れ〜あ〜  
棒〜と〜あ〜

秘而や人のふ度は蓋しせよ  
 おうたひのあはれをいふ  
 友おのころしりてあはれいあはれ  
 一かたは友のらうたひの  
 時りひとあはれいあはれいあはれ  
 ひととあはれいあはれいあはれ  
 まつとあはれいあはれいあはれ  
 らん光あはれいあはれいあはれ  
 そとあはれいあはれいあはれ  
 玉さうあはれいあはれいあはれ

一休の想南載公乃述作也。まを早  
 下りふ海くまの悪老下りまに一見とあ  
 こととよりあはれいあはれいあはれ  
 内此所會下りあはれいあはれいあはれ  
 事さふふくもあはれいあはれいあはれ  
 所取めく當時の連歎れあはれいあはれ

同

備くの内河治り及び上やうく今  
 物又ゆりこと。此の事も家や町ごと  
 らく。使直しくかゝるをみれし。それ  
 物とこそえくゆきと申せし。穀類  
 を食ひたり作ありしは。その後のい倉  
 大時様中し。あそまのりし。かゝる  
 しく感し作する。やうく紙と治  
 多。息息中將下り書て。戸のうとゆき  
 うの作也。又このは。そのとよとよと  
 通り。そのとよとよと。大定と記書つた  
 事。このりりり。む物なれし。あゝの

同題つて。の内也。各は。はまも。當時の  
 未代の子。学う。次と。いふ。や。水。り。  
 一筆の。紙。も。馬。相。如。く。書。と。志。は。賦。詩。  
 へ。あ。め。く。雲。舟。ゆ。く。へ。さ。は。を。ゆ。き。は。  
 せり。と。ゆ。り。く。は。く。こ。の。志。多。記。行。の  
 へ。や。し。め。て。六。良。材。の。芥。と。成。る。事。山。八  
 ね。あ。ら。は。を。と。あ。め。は。琢。磨。以。後。こ。の。後  
 と。地。也。其。由。来。と。志。ゆ。り。り。り。多。柳  
 翰。墨。よ。余。と。れ。の。も。也。時。よ。明。應。丁。己。此  
 志。大。事。り。此。事。志。家。次

世鏡抄序



藤原公友

神の乃物沈みたる事乃安らして世乃  
 らとらばとてさし柳宮義政公果せふ  
 可留給ひしやうふ道去入たうやし  
 河とせまりし西よりううかつて  
 とらふらんいふらんお定かねけり  
 じしは地沈みらんれと海とさけりや  
 長享年中しりお正乃とてさし度と那  
 士世とみらんよとてさし度将良臣多  
 くとと君と君とてさし大樹と大樹と  
 あり大君新威とけとてさし代姓大樹

一とらとて法入我神乃控とてさし  
 之教乃通と御とてさしあり人皆根と根  
 らして根の糸中凡と内と内とて外と  
 ありとて昔神明乃とてさし美玉の  
 ありありとてさし我魚とてさしとらふ  
 ありとてさし世乃世乃人とてさし父母とてさし  
 ありとてさし連つたのさうとてさし  
 ありとてさし世乃世乃わらとてさし  
 ありとてさし

由と鏡の序

友東を良











釋肖柏

宗叱後唐一竹一枝玉して夏庵此二  
字新神和といふ家人乃能書よわの勢  
ももてあり竹うおもひうけぬ筆にて  
感情淡わす

かーあーなもろー海にも筆よそ  
きうてうえんくろゆめのみ居た  
又宗補回ふよ此居号は唐筆をわん勢  
竹一一人の國もあふ思ふさうりくま  
おほいさ

あつちよかきーちたうちきんてんてん

草庵入る海回隣り長松花樹めくき  
り。前庭よ大なる巖あり。所就めくく極  
虎りーゆるり。海色の石あいまりーさるさ  
中よ紅梅ありよさきさあり。あーやわ里よ  
アもろくーはーありてさあさね。横斜  
三四丈ーもよつりかすさるの井あり。  
煙乃かりきまらぬる。桐葉おほひて暑秋  
避りぬりあり。田時の墨草来よまきす。  
是をもてあうひて晨夕志故忘る。よるゆ  
書院を弄花軒と号す





後と濺のみかり。香を沈水とりのやうして。四  
 よ久く侍。南斎侍。紅麝中。海のこゝろたの  
 き。沈香。あこせたら。このい。本母。何。系  
 新枕。あ。を。も。て。い。や。家。こ。よ。い。ま。た。れ。る  
 秘言。も。侍。い。い。い。み。あ。う。こ。あ。う。と。れ。い。  
 夜雨。同。冬。の。枕。は。盥。簾。の。衣。和。麝。裏。の  
 因。と。ぬ。と。み。く。吟。詠。の。印。録。の。好。酒。り。に  
 南。齋。味。と。う。ら。み。お。別。の。移。り。ぬ。き。加。別。乃  
 菊。花。天。野。の。お。群。う。は。と。お。め。房。く。濁。醪。い  
 ち。ゆ。も。て。い。ぬ。よ。千。憂。と。散。一。或。い。ま。夜。と  
 こ。ぬ。い。て。醉。を。け。う。い。れ。を。い。て。風。を。と。

けて。稀。か。う。か。於。め。も。こ。え。こ。り。あ。い。く。舞。と  
 長。う。く。い。ふ。と。年。お。れ。う。め。よ。う。と。と。棟。建。仁  
 幸。れ。正。宗。和。尚。の。奈。下。と。う。け。一。言。若。也。常。卷  
 お。は。か。て。旧。好。たり。こ。の。酒。と。記。一。好。を  
 お。う。の。そ。い。一。章。と。書。一。と。愛。と  
 歌。一。結。つ。り。を。辞。奇。妙。感。歎。ふ。て。述。と。や。と  
 小。わ。け。書。ま。は。け。や。よ。く。お。け。事。や。い。と。い。く  
 書。あ。い。す。い。と。い。一。語。を。う。ち。一。い。と。書。ま。は  
 よ。き。い。い。い。い。い。と。お。も。い。と。い。い。い。い。い。い  
 志。し。り

● 雪の何れ西芳もい遊るる辞

多岐良義具

永正八年十二月廿八日宮内少輔藤原  
 朝光卿より馬とありりひらきめいふより  
 一めり井よりゆれを遠城守のふりかへり  
 さいしきまのふりかへりよ遠く西条寺の佳  
 境よりいひのふりかへり山鏡とつけり  
 比叡のふりかへりら北峯とつけり  
 らんちゅうよおよもゆされとゆりのふりかへり  
 もつらりそとおほして一首保とつけり  
 と見えゆい何りより一何りとつけり  
 よめりぬと殊勝のわらふりかへり

て明子よりより各贈答よとつけり  
 れとつけりよ誌しゆりよらん

菅原和長

此一帖を後の書光園に持たせ殿志願し  
 とうけりちりちりん元也の時とせりいふあり  
 湖よりとあやとせりぬ遠陽記より白鹿曆  
 二年正月廿九日幸西天晴早旦より准后  
 一春と今日より後光教院七回より御  
 遊覧の御をせり禁中よりとせり法  
 華懺法行とせり右幕下御参候





